



Title	Jerusalem 一考察
Author(s)	小林, 恵子
Citation	Osaka Literary Review. 1974, 13, p. 39-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25723
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Jerusalem 一考察

小林 恵子

I

W. Blake は本質において常に宗教的である。彼が最も興味を引かれて
いるのは、真の宗教、芸術、知識であり、それらの具現されたものが、彼
の詩であり、絵画である。彼は、詩を「知的諸力に向けて語られる寓意、
しかし形而下的理解力には全く隠されているもの」¹と言う。一八〇三年
に、荘厳な詩を「寓意」と定義して一年後、彼は二つの大きな作品に着手
することになる。*Milton* と *Jerusalem* である。そして *Milton* が一八〇
八年に完成されているのに対し、*Jerusalem* が十六年の後、ようやく完成
をみるところから、後者は彼の苦難の生そのものの集大成的意味を持つ作
品といえよう。Harold Bloom は、“A lifetime of experimentation with
new poetic forms and a new articulation of mythic structure reached
its climax in *Jerusalem*,…”² と述べている。実際、作品中にあらわれる
「私」に読者は、靈感を受けて震えている詩人の姿、課せられた使命の重
たさにあえぐ詩人の肉声を感じとらずにはおれない。

Trembling I sit day and night, my friends are astonish'd at me,
Yet they forgive my wanderings, I rest not from my great task!
To open the Eternal Worlds, to open the immortal Eyes
Of Man inwards into the Worlds of Thought, into Eternity
Ever expanding in the Bosom of God, the Human Imagination.
O Saviour pour upon me thy Spirit of meekness & love :
Annihilate the Selfhood in me : be thou all my life!
Guide thou my hand, which trembles exceedingly upon the rock of ages, ...
(Pl. 5)

そして、ここに述べられた「偉大なる仕事」達成への努力が、*Jerusalem* の展開である。この小論では、Blake の考える「墮落」を問題提起にして、彼の根底に流れている「真の人間の生き方」について考察してみたいとおもう。

II

Jerusalem は、Blake の作品中その allusion においても、tone においても、最も biblical なものといえる。しかも、型自体 Adam と Eve が、Satan により Eden の至福から追放され、それ以後生まれてくる人間はすべて、罪と死に定められた、という Bible の原型をとっている。が Blake の場合は、Britain が Patriarchal Religion の原初の御座であり、その黄金時代は、Beulah と呼ばれ、宗祖は Giant Albion, Jerusalem がその妻である。この巨人は力強い手足の中に、天地のものをことごとく含んでおり、彼の Emanation と呼ばれる Jerusalem は Albion の女性的半面を示す霊的美、自由の象徴である。Blake 神話の中では、この時代、人々がめとったりとついたりするという形式はなく、人々はすべて intermarry する。すべてのものが、Human Imagination の中で存在し、“Humanity knows not of Sex,”³ だからである。人間は Male & Female という男女同価値的存在であり、Male & Female 合一体は Emanation 交流により、流入流出自在という free love の世界でもある。

When in Eternity Man converses with Man, they enter
Into each other's Bosom (which are Universes of delight)
In mutual interchange ; and first their Emanations meet
Surrounded by their Children ; if they embrace & comeingle,
The Human Four-fold Forms mingle also in thunders of Intellect ;
But if the Emanations mingle not, with storms & agitations
Of earthquakes & consuming fires they roll apart in fear ;
For Man cannot unite with Man but by their Emanations
Which stand both Male & Female at the Gates of each Humanity. (Pl. 88)

Albion は Luvah の Emanation, Vala の美にひかれて彼女を愛し、一

方 Jerusalem は Albion の胸から流れ出て The Lamb of God の花嫁となる、という形式である。しかしこの Beulah の世界に「墮落」という現象が生ずる。もともと Albion を構成する四つの要素 Four Zoas のうちの、passion を代表する Luvah が彼の Emanation, Vala に Albion を殺せと命令するのがその始まりである。この「墮落」の概念に関して、保田氏は、「Blake の愛の観念は、意識空間を共通することによって、共通の意識空間が破壊され、あるいはその成立が妨げられるところに愛の崩壊を見る。」「Blake も聖書も、人間の墮落を自我の反逆に求める。しかし聖書では、『善悪を知る木の実』を人間が食べることを条件とするのに、Blake は自我が全体の調和を破ることに求める。」⁴と、初期詩篇において述べているが、この言説はそのまま Jerusalem にもあてはまる。

When the Individual appropriates Universality
He divides into Male & Female, & when the Male & Female
Appropriate Individuality they become an Eternal Death. (Pl. 90)

一個の個性を形づくっていた Albion は、別の個を主張する Luvah-Vala の抬頭によって、Emanation, Jerusalem の流出を見、彼女はもはや元の位置を回復できない。そのため、彼の肢体に含まれていた天地のものがことごとく逃げ出す。人間の四つの eternal sense である Four Zoas も己々、Albion から離れて各自の element を主張する。Albion の息子達、娘達も逃げていく。ここで Albion は自我 (Spectre) そのものとなり、Beulah から完全に追放されて rocky fragment と化す。Blake は、この Emanation 交流のない Spectre とは人間の中に潜む reasoning power であり、人間と人間とが記憶によってしか交流しないものであるとのべる。

The Spectre is the Reasoning Power in Man, & when separated
From Imagination and closing itself as in steel in a Ratio
Of the Things of Memory, It thence frames Laws & Moralities
To destroy Imagination, the Divine Body, by Martyrdoms & Wars. (Pl. 74)

Beulah から墮落した Spectre の世界を Blake は Ulro と呼ぶ。ここでは、Chastity と Morality が法則化され、罪を犯したものはいけにえの法によって滅ぼされ、人間はますます強固な Spectre になっていく。全ての emanative delight は罪として禁じられ、Emanation は Chastity と Morality を dogma とする Vala の宗教 (Natural Religion) の繁栄のため生き埋めにされる。Emanation の属性である Inspiration は否定され、Imagination は重罪のもとに禁じられる。この Ulro の地に立つ教会は Virgin Mother, Vala をまつり、彼女の二人の Covering Cherub は Voltaire と Rousseau, そこに立つ三人の像は、Bacon, Newton, Locke である。この殿堂は Blake のきらったいわゆる Deism の殿堂であり、彼の Deism 嫌悪は、若い時代から少しもかわらず、*Jerusalem* においてはますますひどい毒舌的調子を帯びている。

Those who Martyr others or who cause War are Deists,... All the Destruction, therefore, in Christian Europe has arisen from Deism, which is Natural Religion. (Pl. 52)

義、道德のみを重んじる Natural Religion の殿堂には、次々と罪の犠牲が捧げられ、その犠牲の血をよろこんでするのは、残忍を呈する女性的意志、Albion の娘達である。彼女達は死人の血をすって、女性の意志だけで子供を紡ぎ出し、戦争へと駆り立てて又その血をすうという残虐をくりかえす。そしてこれが Ulro 下での生殖である。恐らく、人間が Spectre と化し、Virgin Mother, Vala の支配する、Ulro の巷を描く Blake の目には、Natural Religion 或いは Morality に拘束された当時の英国、さらには世界の悲慘が明らかに見えていたにちがいない。

I hear the screech of Childbirth loud pealing, & the groans
Of Death in Albion's Clouds dreadful utter'd over all the Earth. (Pl. 30)

III

II で示した墮落後の死んだ状態を Ulro という世界にみたてた Blake

は、それを救うのによりすぐれたものとして、Generation, つまり死滅はするけれども、正常な生殖によって世代を継いでいくという Platon の「絶対善を永久に所有しようと高められていく衝動的生命力, Eros」に似た次元を想定する。「滅んでゆくものは、その本性からしてできるだけ無窮不死であることを願うが、それはただ生殖によって、古いものの代わりに新しいものを残してゆくことによるのみ可能である。この一つの美しい肉体の所有へむけられる愛を、芸術上の、心霊上の、哲学上の、宗教上の美への愛へ昇華させる、」という Platon の Eros は後に、Neoplatonism に受けつがれ、中世神秘主義の愛の概念としてうけつがれたという説を援用すれば、恐らく Blake のこの Generation 想定には、歴史的基盤があるのであろう。そしてこの Generation の世界の輪をまわすのが Los の役割である。彼は Time という属性を持ち、彼の Emanation, Enitharmon は Space の属性を持つ。そして Los 自体、もともと Albion の Zoa 達の一人 Urthona という Imaginative Power を司どる Zoa の Spectre という形をとり、結局、墮落後の死すべき運命を持つ人間という位置にある。ただ Urthona の持っている Imaginative Power をになっているところに、Blake の意図があり、Los の設定は、II で見てきた当時の禁欲的な道徳に対する肉の自由による新しい芸術の昇華という Blake の祈願である。Los はこう叫ぶ。

I must Create a System or be enslav'd by another Man's.

I will not Reason & Compare : my Business is to Create. (Pl. 10)

彼の創造するのは、この Ulro の世に、Hammer と Anvil をもって霊の都、芸術の都、四態の Golgonooza を建立することである。この Golgonooza は慈しみの殿堂であり、重層的な意味を持つ建築場でもある。というのは、この場で、Los と Enitharmon の息子達は、溶鉱炉で Hammer を持ち、娘達は Loom で織るということから、そこは当時の産業革命の二大産物である鉄鉋と織物の中心の場であると共に、Generation の名の如く、この二つの象徴は恐らく男女の genitals の象徴でもあるからである。この Golgonooza の建設場は、生命の起源の場をも思い浮かべさせるほ

どである。さて Los は prophet の名をとり、Blake 自身と微妙に overlap しつつ、六千年の年月を歩き見る。この Ulro の時代に彼一人、Divine Vision を保っている人間として、この世を更生へと向ける力を有しているのである。墮落そのものが、永遠から時間への追放であり、死滅である以上、Los に託された Time と Imaginative Power によって、いかに Albion を救出し、いかにもとの Beulah を回復するかが、Blake 自身に課せられた使命となる。Los が受けた天からの声は、又 Blake が聞いた偉大なる啓示であろう。

I give you the end of a golden string.

Only wind it into a ball.

It will lead you in at Heaven's gate

Built in Jerusalem's wall.

(Pl. 77)

'Beulah からの墮落以後、Emanation から分離した人間一人一人を正常な generation 更作によって生命の糸から七十年のよわいを織りそれを完成させるため、Imaginative Power によって新しい system を創るため、霊の都 Golgonooza 建立のため、轟くふいごをうちあげながら、Los は又、人間の身という性質上自分も Spectre を持ち、彼の Emanation, Enitharmon も分離する憂目を持っている。この悲哀に泣きうめきながら、Los はこう歌う、「妻とは何か？淫婦とは何か？教会そして劇場とは何か？それらは同じことではないか。いまは分離して存在しているが、宗教も政治も、もともと 同じものではないか。男も女もない。いまは女性 Vala が Morality の下に勢力をふるって妻という確固とした 道徳の座、教会という犠牲の場、Natural Religion という Righteousness を重んじる宗教が支配し、男を残酷な戦争へ狩り出していく政治の世であるが、この世にはただ一つの宗教、一つの道徳があるだけだ。それは Jesus の宗教、慈悲の道徳だ。」と。さらに、「時に 支配され 閉じこめられている以上、我々は影にすぎない。あのもとの Beulah は、死滅する身においては瞬間的愛によってのみとりもどせうる、又その一瞬に芸術は完成する」という。こうして Eros の原型、つまり、sexual ecstasy と芸術的創造にお

ける ecstasy との一致が、大きな肯定を持って Los によって歌いあげられる。Blake が創造した Los の活動は、時いたるまで、或いは自分の Spectre と闘いつつ、或いは自分の Emanation を回復する努力をしつつ、運命の輪をまわす positive な人間愛の更作なのである。その優勢は “Holy Generation, Image of Regeneration” という言葉に端的にあらわされている。

IV

Blake の顕著な特性である dialectic な性質を考慮した場合、II で述べた墮落後の Ulro の世界は一つの極であり、III で述べたより優勢な Generation の世界はもう一つの極といえることができる。そして Ulro-Generation を dynamic に合へと止揚する媒体として、Blake は神、又人類の罪の償いとして Jesus をつかわした神の愛をもってくる。Ulro 下に死滅している Albion 救出は、Los の人間愛更作だけでは完了せず、この殻をぶちやぶるもう一つの力として神の愛を信ずる信仰への飛躍があるのである。しかし、Blake の神は、旧約の Jehovah ではなく、Albion の神 Elohim Jehovah という創造神である。Blake 自ら創り出した Elohim Jehovah は、Jerusalem の始めから、垂直の声として登場する。

Awake! awake O sleeper of the land of shadows, wake! expand!
 I am in you and you in me, mutual in love divine :
 Fibres of love from man to man thro' Albion's pleasant land.
 In all the dark Atlantic vale down from the hills of Surrey
 A black water accumulates ; return Albion! return!...
 I am not a God afar off, I am a brother and friend ;
 Within your bosoms I reside, and you reside in me :
 Lo! we are One, forgiving all Evil, Not seeking recompense :
 Ye are my members, O ye sleepers of Beulah, land of shades! (Pl. 4)

この神は極めて新約的な神である。⁶ Elohim は Albion の墓の arch をたて、星を merciful order に結びつけ、残酷の法、義の犠牲を求める罪の律法を平和にかえる 遍在する慈しみの神である。J. Bronowski は、

「Blake は英国教会の伝統的儀式を嫌う dissenter であった。しかも、彼の形式は他の dissenters より神秘的である。彼の繰り返している宗教的政治的国教反対の根は、一六四〇年代の清教徒革命までさかのぼることができる⁷。」と述べているが、恐らく彼の世を支配していた宗教の儀式だけを重んじ、人間性を無視したやり方に対する不満が、Elohim 創造の動機であろう。彼独自の神は、語り草になっている愛弟 Robert の死に際して、「霊が、手をたたきながら天井を昇っていくのを見た。」⁸とか、彼の patron であった Hayley にあてた手紙に見られる、「私はいつも、霊と心の中で対話している。」⁹という言葉に、如実に表わされている霊を司どる啓示宗教の神である。人間の原型 Albion が墮落し、死の状態にある以上、人間はすべて Spectre として生れる。そして Elohim はこの Albion の Spectre の状態を救うために Jesus をつかわすという愛を示す。Jesus は、全人類の罪の贖い、人々の罪を許すために、神自らつかわした神の子である。そして Jesus 一人だけが、他の人々のために、罪のない身を捨てて。これこそ神の愛である。Blake の神の愛、つまり「罪の許し」を示す self-annihilation とは、Christian Brotherhood を土台にした、個人の中に潜む Spectre の消去とということである。敷衍すれば、人間の reasoning power, 世間の natural morality, natural law に拘束された自我意識の放棄ということである。Blake にとって Jesus はその典例なのであった。そして、彼は Jesus を Imagination と呼び、信仰の核髄は、Imagination という宗教である、という観念に到達する。人間は、時の内において、Los (Imaginative Power) に代表される Eros を通して世代をつくり出していく生命力 (energy) を、Jesus (Imagination) をつかわした神の絶対的愛が止揚して、self-annihilation を通過し、新しい自己へ覚醒するのである。この真意を知った Spectre と化している Albion は、他のために自己を捨てる。それが、Apocalypse, 肉体が霊に結合されるより一層高い目的である Imaginative World への開眼なのである。その時の情景を Blake は次のように記す。

All was a Vision, all a Dream: the Furnaces became
 Fountains of Living Waters flowing from the Humanity Divine.
 And all the Cities of Albion rose from their Slumbers, and All
 The Sons & Daughters of Albion on soft clouds, Waking from Sleep.
 Soon all around remote the Heavens burnt with flaming fires,
 And Urizen & Luvah & Tharmas & Urthona arose into
 Albion's Bosom. Then Albion stood before Jesus in the Clouds
 Of Heaven, Fourfold among the Visions of God in Eternity. (Pl. 96)

Blake の Apocalypse は、いつも瞬間的である。一瞬にして、死塊と化した Ulro の地は消え、ごうごうと燃える炉、Golgonooza の建築場は、生命の泉に変わる。これは、*The Marriage of Heaven and Hell* を書いた初期の時代から、Blake がずっと抱き続けてきた芸術的 Inspiration の瞬間、Imaginative World 突入への瞬間である。しかしその世界の様相は、非常に mystic である。彼は、宇宙を一個の有機体と見、一個の人間と見る。彼は、人間の永遠的な Imagination によって、一切の事物を、永遠な形として見、一個の連続体と見る。そしてこの全一を司どる有機体の Emanation が Jerusalem なのである。Albion の肉体は、この self-annihilation の段階を経て、ついに Jerusalem と合体する。Emanation を得た今、Albion の Identity は、完全に回復され、宇宙はもとの美しい秩序を保つ。*Jerusalem* 最後の四行は、その結晶化された表現である。

All Human Forms identified, even Tree, Metal, Earth & Stone : all
 Human Forms identified, living, going forth & returning wearied
 Into the Planetary lives of Years, Months, Days & Hours ; reposing,
 And then Awaking into his Bosom in the Life of Immortality. (Pl. 99)

V

当時の社会に、人間の本性が失なわれ、人はどうしようもない束縛にとらわれていて、それが悲惨を生んでいる、ととらえた Blake は、その状況を、Albion の魂の病、それ故の死と考え、それを回復させるために、Albion の Four Zoas のうちの Los を働かせて、彼に霊の都 Golgonooza

を建てる使命を負わせる。しかも、Albion のもともとの本質的一面からとりだして創造をおこなわせるというのは、人間的な努力であり、Los の一面は又、罪を負う非常に世俗の人間像である。それだけでは Albion の病は回復しない。そこで、神の愛の教えが入ってくる。神が人類の罪のために、Jesus をつかわしたという絶対的な愛への信仰である。この Los の努力と Jesus the Imagination の信仰をたてとして、霊肉の一致により、人間の本性は体现される。これは Blake の裡に流れる「人間の真の生き方」の提示であろう。そして恐らく、自ら個性を貫き通した Blake が、彼の描く絵画が認められず、詩も一部の人をのぞいては、狂人の作くらいにしか思われなかった故に、彼の憤りから引き出された信条でもあったろう。当時の個性を抑圧し、魂にしる、肉体にしる、自由というものを束縛する社会の倫理観を物語るものであるが、「彼の生き方」は、現代の数多くの人間に、人間性を回復させ、人と人との関係を救う一つの指標となるのではあるまいか。確かに、Jerusalem は、時代を強く反映し、時代性の濃厚なものだが、その中を貫く絶対に時代と妥協しない彼の「詩精神」は、現代もなお新しい。

註

原詩の引用はすべて、*The Complete Writings of William Blake*, ed. Geoffrey Keynes, Oxford U. P. 1969, により、各々、原詩の Plate 番号 (略 Pl.) で示してある。

1. Letter to Thomas Butts 6 July 1803
2. Bloom, H., *Blake's Apocalypse*, p.365
3. Pl.44
4. 保田正義、『ウィリアム・ブレイク研究』p.82, p.237
5. 平凡社、『世界大百科事典』3巻 pp.200—201
6. cf., *The Acts*, XVII; 27—28, “...he (=the Lord) be not far from every one of us; For in him we live, and move, and have our being;”
Romans, XII; 5 “we, being many, are one body in Christ, and every one members one of another.”
7. Bronowski, J., *William Blake and the Age of Revolution*, pp.11—12
8. Gilchrist, A., *Life of William Blake*, p.51
9. Letter to William Hayley 6 May 1800